

父親の育児参加

— 親子関係が患児の発達に影響したと考えられる事例をととして —

Paternal involvement in child rearing in the hospital : A case study.

南3階：○守屋 綾子・滝沢 圭恵・下條 美芳

1. はじめに

核家族化が中心となってきた現代の家族構成で、女性の社会進出・共働き家族が多くなり、父親・母親の役割は、単に分担されるのではなく複雑に行われていると考えられる。

さらに病児をかかえる家族においては、生活基盤となる場所が2カ所に分かれることになり、父親は様々な役割を担うことになる。一般に父親は育児・躾が本来の役割でないために、一人で生活面・感情面の躾を主体として行なうことは困難だと考えられやすい。

今回、父親が付き添うことにより、生活面・感情面に大きく影響を与えた事例を経験したため、その事例について考察してみた。

2. 方法

付き添う人ごとに患児との関わり・患児の発達状況を分析する。

3. 事例紹介

患 児：Y・Sちゃん 女児 2才半

病 名：Common ALL

入院期間：H7. 11. 1からH8. 8. 3

家族構成：父 母 姉 本人 4人暮らし

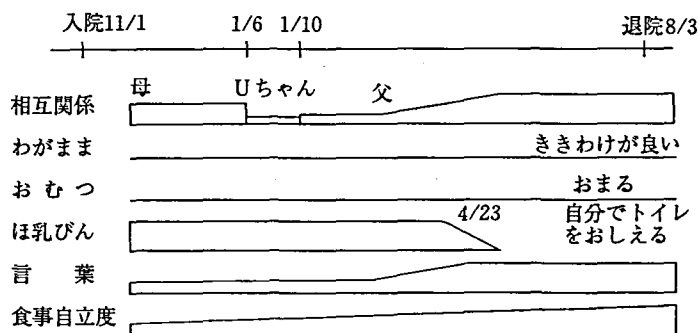
Yちゃんは生後、家の都合で母の叔母にあずけられており、父母姉と暮らしたことがなかった。今回の発症をきっかけに、母は九州の病院で始めてYちゃんと暮らすようになった。

(図1)

生活発達は、昼寝・就寝時を含め哺乳瓶をくわえており、又、常時オムツを使用していた。食事は気がむくと自分で食べていた。

精神発達は、わがままで言葉も少なく、看護婦など他者を受け入れることはできず「バイバイ」「あっちいって」ばかり言っていた。

図1



< 入院経過 >

4. 実 際

①母との相互関係 (図2)

兄の機嫌が悪いと母は怒ってつきはなし、本人が欲すれば哺乳瓶を与えており牛乳を飲んでいた。兄は一人遊びをし、母と一緒に遊ぶということは少なく、それを見ているだけであった。母がいない時はおもちゃを投げたりもしていた。母は血小板減少時などは加減するが、叩いて叱っている姿もよくみかけた。看護婦はYちゃんに受け入れてもらえず、生活面で関わることはほとんどなかった。母の仕事の都合で、18才のいとこのUちゃんが付き添うことになった。

②Uちゃんとの相互関係 (図3)

“Uちゃんはおんぶしてくれる人”という感じで、食事の世話や寝かしつけたりするのは思うようにいかなかった。Yちゃんは母を探して泣いてばかりいた。看護婦が中心に生活の援助を行っていた。夜寝ないため、Uちゃんがおんぶしをして夜を明かすことが毎晩だった。

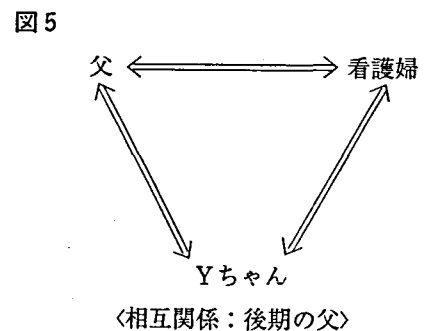
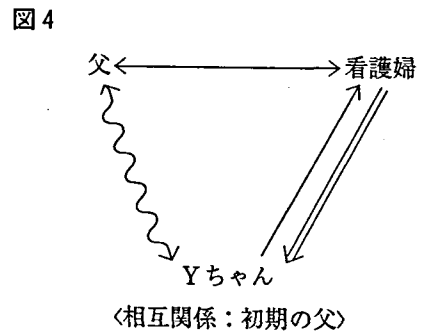
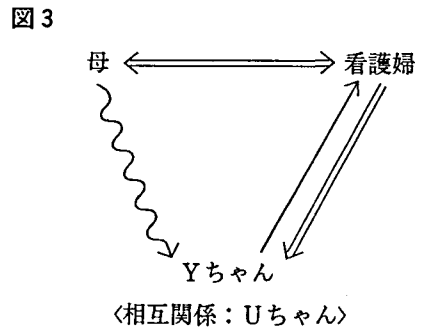
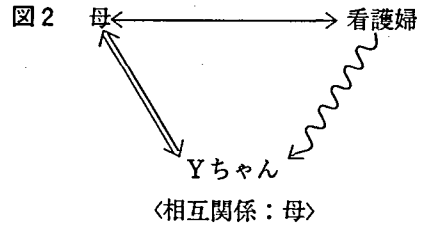
18才のUちゃんでは生活の援助が無理であり、付き添いはずした。看護婦が交替で世話をしたが、常に母の後を追うYちゃんには付き添いが必要だった。そして父が付き添うことになった。

③父との相互関係 (図4)

転院当初、父は九州には行っておらず、患児が慣れていないので大丈夫かという不安はあった。

1・2月始めは、父もYちゃんが嫌がることはやろうとせず、看護婦側で行っていた。内服もかなり嫌がっていたが、2月中頃、父が介助することでスムーズに内服できるようになり、これがきっかけで積極的に関わるようになった。患児は看護婦への気分もむらは多少あるものの機嫌よく関わるようになり、言葉も増え、自分の欲求を表わす言葉もみられるようになってきた。

4月上旬、父が哺乳瓶をはずそうと乳首を切って、夜間の哺乳瓶くわえを減らすことができた。患児が調子が悪いとき、一時的に母に変わった際に哺乳瓶



を与えてしまい、また夜間くわえるようになってしまった。再び父に変わったが、Yちゃんも自我をとおそうと泣いてばかりいた。父は泣いて抱っこをせがむのを廊下でじっと待ち、自分から寄ってくるのを待っていた。他患の付き添いに促され哺乳瓶はずしを再び始めた。(図5)

4月下旬、看護婦に哺乳瓶はずしの必要性を質問してきたため、口内保清潔の目的などの話をした。その後哺乳瓶はずしの具体的な内容について質問された。看護婦は「そばに置いておくと欲しがるから、見えないところに置くか捨てちゃったことにすれば?」という話をした。夕方、父は準夜の看護婦に哺乳瓶をあずけた。Yちゃんが泣いても寝なくとも、それに付き合い、院内散歩をしたりしてとにかく寝るまで付き合った。朝方まで寝ないということが続いたが、1週間ぐらいでYちゃんは哺乳瓶を欲しがらなくなった。その後看護婦が父に聞くと「時々思い出して言うが、自分でわかったようで絶対に欲しいと言わなくなった。」と。そして哺乳瓶を本当に捨てるように依頼された。

6月初めより、沐浴時、父がいなくても看護婦と沐浴できるようになり、自分から「体を洗う」とガーゼを持って洗うようになり、6～7月にかけては、オムツを変えてほしいと言うようになり、トイレを教えるようになり、昼間はトイレへ行けるようになった。

5. 分析

母は哺乳瓶はずしの時「そんなに無理をしなくても」という問題意識がないようだったため、母の役割について場面をおってみた。

九州の病院入院時「始め慣れないと思ったの。でもここと違って個室だったから、見る人は看護婦さんとお医者さんと私たちだけだったから私にもよくなつてくれていたわ。」という言葉からみられるように、初期の親子関係の形成にあまり努力が感じられない。

母と一緒に遊ぶことはせず、ベッドに患児を投げつけても叱るという行動が見られており、過支配型の養育態度であると考えられる。Yちゃんの暗い表情・自主性の欠如・陰日向のある行動は、母の育児態度からきていると評価できる。

母の代理として、18才のまだ十分に成長していない“いとこ”を選択したことや、父が哺乳瓶はずしやトイレトレーニングをしていたときも協力的でなかったこと、上の子に対しても、5才まで哺乳瓶を使用していたことなどから、養育に対して一般的な母親の考え方と違うと感じられた。しかし、昔は5・6才までおっぱいをくわえて寝ていたことや、お子守をする年少の子がいたことを考えると、自然なのかもしれない。

次に父について分析してみると、父はYちゃんに慣れるために、一緒に遊ぶことから始めた。つきはなすこと、甘えさせることを上手に使い分け、その結果Yちゃんは父を信頼するようになったと考えられる。

当初いやなことはさせたくないと考えていたが、内服は父でなければできないということをきっかけに、育児について必要なことなどを知ると、実施するようになった。

6. 考察

入院という突然の出来事により、家族の役割は大きく変化する。父の役割はその家族によって違いはあるが、特に養育期における父の育児参加は、重要な役割になると考えられる。

地域的な構造より、当病棟の患児は全県にわたり入院してきており、その距離からも、必然的に患児と母は家族から引き離された状態になってしまう。面会に来ることが困難となってしまうのである。親子関係が、家族にいるときよりも児の成長に影響してくることは避けられない。

母は児が病気になったことから自然な感情で子供に接することができず、誤った親の養育態度をとることになってしまう。できうるならば、父の参加を多くし家族に近い状況をつくることで、児の育成に良い影響を与えようと考えられる。

7. まとめ

今回は、事例を通して患児の周りの人との相互関係と発達について考察してみて、父も育児に主体的に参加できることがわかった。

8. おわりに

看護婦が両親に求めるものとしては、生活の場が2ヵ所に分かれるため、家庭での生活・病院での生活を父母が協力的に行えること、母が付き添いの主である場合、サポート的であれば、父は母の精神的な助けになること、また時々、付き添いを代わり母の体を休ませてあげてほしい。

付き添いのない場合、面会の時は父母で面会に来てほしい。

< 参考文献 >

奥野 明：誤れる親の態度と子供の性格

斉藤 勇 編：人間関係の心理学，誠信書房，1983

古賀 編：教育心理学要説，協同出版，1964

藤原千恵子：乳児をもつ父親の養育態度の形成に関する研究，小児看護 vol.19, No.13 P1774～1781, 1996